

早稲田大学英文学会(文学学術院)・英語英文学会(教育・総合科学学術院)  
2014年度合同大会  
(2014年12月6日(土)早稲田大学早稲田キャンパス16号館)  
研究発表会(13時00分~15時15分)研究要旨

キーツと受容の美学  
— 『エンディミオン』を中心に—

教研 修士2年 岩本 浩樹

少年期のジョン・キーツ(John Keats)は、チャールズ・カウデン・クラーク(Charles Cowden Clarke)の知己を得たことが決定的な契機となって、古典文学の世界に足を踏み入れた。そして、以後は、むさぼるように数多くの文学作品を読み耽ることとなる。この文学体験のなかで運命的な邂逅を果たしたギリシア神話の物語世界は、のちのキーツの作品の多くに枠組と着想とを提供し、スペンサー(Edmund Spenser)やシェイクスピア(William Shakespeare)、ミルトン(John Milton)らの作品群は、彼の詩行の随所にその残り香を漂わせることとなった。なかでもシェイクスピアの存在は、キーツにとってあるべき詩人像を体現するものとして捉えられ、自らの詩作態度にも影響を与えるものであった。キーツの詩作意識の根幹に位置する「消極的受容能力」(“Negative Capability”)も、シェイクスピアを念頭に置いて生み出されたものである。

もっとも、消極的受容能力という考え方自体は、決してキーツの独創によるものではなく、ハズリット(William Hazlitt)やハント(Leigh Hunt)の言辞に負うところが多いものであった。一時的に自我を滅却して対象との一体化を図る能力に高い価値をみてとるキーツの意識は、ハズリットの「無私」(“disinterestedness”)やハントの「受容能力」(“passive capacity”)といった概念が拠り所となって形成されたものである。ワーズワース(William Wordsworth)の「賢明なる受動性」(“wise passiveness”)という一節がキーツの詩作意識に与えた影響はたびたび指摘されるが、『人間の行動原理に関する論考』(An Essay on the Principles of Human

Action 1805)をはじめとするハズリットの著作やハントの劇評にみられる想像力論の基盤にも、「受容性」に重きを置く意識が顕著にみられる。詩作に没入するキーツの念頭にあった消極的受容能力とは、このように「受容性」に積極的な価値を認める当時の文芸思潮の産物であったことに留意すべきである。

先行研究では、キーツの消極的受容能力とワーズワースの「賢明なる受動性」とを比較したり、「怠惰のオード」(‘Ode on Indolence’ 1820)をはじめとする一部の作品と詩人の受容性とを関連づけたりする試みはなされてきたが、キーツの詩作品全体を射程に入れた受容性に関する考察はほとんどなされてこなかった。しかし、「長らく受動性(“passiveness”)に耽溺してきた」と書簡で語っている詩人にとり、美なるものを感受することで精神の高揚を覚え、苦悩の受容を通して人生に対する認識を深め、そして喜悦と悲哀とを不可分のものとして享受することにより内省的意識を広げようとする志向性は、彼の作品世界を彩る重要な要素に他ならない。長編物語詩『エンディミオン』(Endymion 1818)を脱稿したのち、詩人が書簡のなかで「花のように受動的で受容的な(“passive and receptive”）」態度に積極的な価値をみてとっていることも注目に値する。

本発表の目的は、『エンディミオン』を中心に、「受容性」という観点からキーツの作品群を検証して、詩人の「美の原理」を探ることである。そのなかで、詩人の作品にみられる具体的な措辞と表現様式の分析を通して、キーツの受容性に関する意識と詩的想像力の捉え方に迫ってみたい。

## キーツの“luxury”における一考察

教研 博士1年 鳥居 創

ジョン・キーツ (John Keats, 1795-1821) は 1817 年 3 月 3 日に、処女詩集『詩集』(Poems, 1817)を上梓した。既に『エグザミナー』(the Examiner, 1808-1886)紙に掲載された作品と新たに創作した詩をふんだんに収録したこの詩集は、ウォルター・ベイト (Walter Jackson Bate, 1918-1999) が指摘するように、傑作と謳われる後期の作品群へと繋がるキーツ

の初期の詩想を表す重要な作品集である。

特に、この本の掉尾を飾った「眠りと詩」(‘Sleep and Poetry’, 1817)には、夢や、詩の着想から実際完成するまでのプロセスが描かれており、これらはジョン・バーナード (John Barnard) をはじめとする多くの批評家が評価するように、キーツの後の詩想の主軸となる様々な要素が鏤められている。眠りに啓示される詩的靈感を謳ったこの作品は、前半部分で外界と詩人の関係を描き、後半部分では神話世界や愛という将来詩人が描き続けようとする主題を謳っている。これらを通じて得られた詩的イメージをキーツは天上から訪れる陶酔のようなものして捉えるのだが、陶酔しきった自身を「豪華な死」(“death of luxury”) という難解なイメージと結びつけてしまう。確かに多くの批評家が述べているように、“luxury” という単語自体は、リー・ハント (Leigh Hunt, 1784-1859) が詩に多用した言葉であるが、豊潤さを示す“luxury” が死と結びつけられる点にキーツ特有の感覚が表されているといえる。さらに、この死への連想は「眠りと詩」のみならず、その後彼の書簡や他の詩作品にも姿を現し、始終キーツの意識を取り巻くこととなる。ペティット (E.C Pettit) は『キーツの詩に関して』(On the Poetry of Keats, 1957) においてこの連想こそが、後期の珠玉の詩「ナイチンゲールに寄す」(‘Ode to a Nightingale’1819) を生み出したと語り、「“luxury” がキーツの表現形式において複雑で非常に個人的なもの」(272) であると指摘している。しかし、この特殊な感覚と彼の詩想の関連性については、ペティットを含めこれまであまり詳しくは研究されてきていない。そのため“luxury” という言葉がキーツの詩想を理解するために不可欠な手がかりであるにも拘わらず、今なおその定義は充分なものには至っていない。

そこで本発表では、まず初期のキーツの詩想に多大な影響を与えたハントの詩想における“luxury” の意図を明確にし、キーツの捉える“luxury” の輪郭を浮き彫りにしたい。さらに、“luxury” に対するキーツ独特の感覚を後期のキーツの作品群から見出し、その感覚が彼の詩想の発展にどのように影響を及ぼしているのかを解明したい。

『アブサロム、アブサロム!』へのポストコロニアルな視座  
—植民地主義的言説を攪乱させる脅威としてのチャールズ・ボン—

教育学部英語英文学科4年 坂本 龍政

ウィリアム・フォークナー (William Faulkner) の最高傑作として名高い『アブサロム、アブサロム!』 (*Absalom, Absalom!*, 1936) は、彼の作品世界における中心的な問題がいくつも散りばめられているという点で、今なおさまざまな批評家たちの関心を惹いてやまない魅力的なテキストでありつづけている。書き込まれた諸問題のうち、今発表でわたしが特にとりあげたいのは、人種混淆の問題である。

この作品のなかで人種混淆が話題になるのは、物語終盤の謎解きパートだ。クエンティン・コンプソンとシュリーヴ・マッキヤノン、ハーヴァードの学生寮のなかで、我を忘れるほど夢中になって、ヘンリー・サトベンによるチャールズ・ボン殺しの動機を解明しようとする。そして明らかになったのは、ヘンリーの動機がチャールズ・ボンの黒い血という「真実」にあったということだ。

批評家たちは、ヘンリーをしてボンを殺害せしめた人種混淆の禁忌について語るさい、おのおの二つの異なった立場をとってきたようである。一方の批評家は、人種混淆を南部イデオロギーに帰結させ、これは南部の宿命的な「呪い」の一部であると説明する。言い換えると、この立場の批評家は人種混淆をナショナリズムの問題として見ているのである。そして重要なのは、人種混淆をナショナリズムの問題として捉えているのは批評家たちだけではないだろう、ということだ。謎解きの主人公クエンティンこそ、これを南部の「呪い」としている中心人物なのである。彼にとって人種混淆は南部人としてのアイデンティティに関わる問題なのであって、だからこそ彼は南部人として深く懊悩していたのだ。

たいしてもう一方の批評家は、人種混淆はより問題であると考えて、これを、植民地と被植民地という関係性が生み出した、植民地主義的なイデオロギーの一部であると説明する。この立場をとる批評家は、クエンティンの懊悩を、無視はしないまでも括弧にくくる。なぜならば、この立場の前提として、20世紀前半を生きたクエンティンには人種混淆と植民地主義を結び

つける論点がそもそも存在しなかったであろう、ということがあるからだ。

そして、今発表が採用したいのは後者の立場である。というのも、人種混淆の問題を、クエンティンが見ることのできなかった、違った見方で検討したためだ。そうすることで、前者では見えてこなかった何かを見出すことができるなら、それこそ批評の可能性ではないだろうか。

このような視点から人種混淆を検討したとき見えてくるのは、チャールズ・ボンが持つ抵抗の契機としての機能である。植民者トマス・サトベンが、植民地主義的な欲望のもとに生み出した BON は、一見白人（植民者）のようでありながらしかし黒人（被植民者）であるという、両義的な属性を付与されてしまった。ところが BON は、その両義的な属性を逆手にとる。サトベンが植民地主義的な「構想」を永続化するために構築した論理であったはずの人種混淆の禁忌を彼に徹底させることで、逆にサトベン家を内部崩壊せしめる。BON はそのような仕方ですべて植民地主義の論理の矛盾を露呈させる、抵抗の契機なのである。

## “A Ghost Story”における偽物性の意味

教研 修士1年 大木 雛子

本発表では、マーク・トウェイン（Mark Twain）の短編小説「幽霊」（“A Ghost Story”, 1870年）に登場する巨人の幽霊カーディフの巨人（Cardiff Giant）の偽物性について分析し、真正性を重視する旧来の価値観と対比しながらこの作品の特徴を明らかにする。

匿名の一人称によって怪談の形式で語られる短編の「幽霊」は、トウェインが得意とするトールテールの形式で語られている。物語は、ニューヨークブロードウェイ街に部屋を借りた匿名の語り手が、そこでカーディフの巨人の幽霊と遭遇するという筋書きで、途中までは身の毛もよだつ怪談話の様相を呈しながらも、幽霊の正体が分かった途端、この幽霊と語り手のやり取りが面白おかしく語られていく。トールテールそのものはトウェイン作品において特に珍しいものではないが、この作品に登場する幽霊が全米中の人々を騙したカーディフの巨人事件で使われた石膏像の幽霊であるという

設定と、幽霊の存在の偽物性が、この作品を単なるトールテール以上の複雑な意味をもたらしているように思われる。

カーディフの巨人事件の概要は、1869年10月16日、ニューヨーク州ビンガムトン生まれの葉巻製造者ジョージ・ハル（George Hull）が、いとこのウィリアム・ニューウェル（William Newell）の農場に一年前に埋めておいた石膏像を掘り出して、創世記以前に存在していた巨人族の化石であるとして興行を成功させたというものである。もともとハルはこの大掛かりな人かつぎを、保守的な宗教観を持つ人々に一泡吹かせてやろうと計画したのだが、19世紀を代表するショーマン、P.T. バーナム（P. T. Barnum）がこの巨人を使った人かつぎに参加し、ハルの真似をして作った巨人を見世物にすることで大儲けの道具としてしまう。結局、ハルはバーナムを訴えるのだが、オリジナルの巨人も本物の巨人の化石などではないことから不起訴となり、バーナムは圧倒的勝利を取めたというのがこの事件の顛末である。本発表では、このバーナムの勝利を偽物性の勝利と捉え、そこに旧来の価値観の敗北の姿を見出していきたい。特に、バーナムの勝利が現実世界を飛び超え、「幽霊」の虚構世界にも反映されていることを指摘する。

続いてこの作品では、カーディフの巨人の幽霊が自分の本体をバーナムが作った「偽物」の巨人の石膏像と間違えてしまい語り手に馬鹿にされるといった話が展開する。本発表では、幽霊がその際に吐露する嘆きの中にピューリタンの時代から連綿と続く真正さを重視する価値観の反映を見出すとともに、幽霊を馬鹿にする語り手の態度に金メッキ時代的価値観の勝利と旧来の価値観の敗北の姿を見出していく。そして最終的には、ヴァルター・ベンヤミン（Walter Benjamin）のいう「複製技術の時代」におけるアウラの凋落までもトウエインが1870年の時点で同作品においてすでに予見していた可能性についても指摘したい。

## メアリ・シェリー作品に描かれたファニー・ウルストンクラフト

早稲田大学 教育学部非常勤講師 平倉 菜摘子

英文学史上、最も名高い著述家母娘、メアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft) とメアリ・シェリー (Mary Shelley)。『女性の権利の擁護』 (*A Vindication of the Rights of Woman*, 1792) によって名を馳せた啓蒙思想家を母として誕生したメアリ・シェリーが、生涯に渡って「ウルストンクラフトの娘」という特権と重荷を意識しながら創作を続けた事実は広く知られている。

しかし「ウルストンクラフトの娘」はもう一人いた。長女ファニー (Fanny Wollstonecraft) である。革命下のフランスで生を受け、3歳になるまでウルストンクラフトの一人娘として生きたファニーは、異父妹メアリの誕生、すなわち母の死とともにゴドウィン (Godwin) 家の一員となるが、ロマン主義時代の天才が一堂に会するような家庭環境の中で次第に居場所を見失い、22歳で自ら命を絶つ。母が二度試みても成功しなかった自殺に、ファニーは一度で成功してしまうのである。

偉大な母や天才肌の妹と異なり、ファニーは作品と呼べるものを何も遺さなかった。しかしウルストンクラフト・ゴドウィン・シェリーサークルの中で生きた彼女が、周囲の天才たちに何も影響を与えなかったとは考え難い。特に「ウルストンクラフトの娘」としての自負に満ちたメアリ・シェリーは、自分が会ったことのない母とともに生きた経験を持つファニー、母の『北欧からの手紙』 (*Letters from Sweden*, 1796) や『マライア』 (*The Wrongs of Woman: or, Maria*, 1798)、そして私的書簡に愛情を込めて描かれた姉に対し、どのような意識を持っていたのだろうか。幼少期に同じ屋根の下で暮らした姉が若くして命を絶った事実をどのように受け止めていたのだろうか。

本発表では、これまでほとんど論じられることのなかった、メアリ・シェリー作品におけるファニー・ウルストンクラフトの存在に光を当てる。ファニーの自殺直後に書かれた『フランケンシュタイン』 (*Frankenstein*, 1818) の第5章から第7章、及び初めて「ファニー」という名を登場人物に用いた『ロドー』 (*Lodore*, 1835) を取り上げ、ウルストンクラフトの唯一の娘としての自分を誇っていたメアリ・シェリーが、生前は影の薄かった異父姉ファニ

一の存在をどのように意識し、自らの作品世界に蘇らせたかを検証することで、「ウルストンクラフトの娘たち」が奏でるダイアローグに耳を澄ませたい。

## Effects of Content and Language Integrated Learning (CLIL) Classrooms on Students' Motivation

教研 修士2年 菅井 華子

There are only a small number of previous studies about learners' motivation in content and language integrated learning (CLIL) classroom. Very little research has been carried out to investigate if learners in EFL and CLIL classes have different motivation toward learning a foreign language. It would be worthwhile to investigate this issue for future education in school. Dornyei (2001) agrees that students' motivation changes according to how a teacher teaches English. Hence, there can be an assumption that EFL and CLIL learners might have different language learning motivation because these two types of settings might work differently on students' motivation. The aim of this study is to identify the general features of students' foreign language learning motivation in CLIL classrooms. In order to investigate this issue, the purpose of the present study is to address these following research questions: 1) What motivation do CLIL learners have?; 2) Is the learners' motivation in CLIL different from that in EFL?; 3) If so, what are the typical features of motivation in CLIL?; 4) How does learners' motivation change through the CLIL instruction?

Two groups of Japanese high school students in EFL and CLIL classroom participated in this study: one group consisted of 79 students who received one year's regular EFL instruction, and the other of 79 students with one year's CLIL instruction in addition to the regular EFL instruction at the same high school as the students in the first group.



The author used a questionnaire and interview method. Results showed that the CLIL students had overall lower motivation than the EFL students, although most of them were found to have positive attitudes toward CLIL. The effects of CLIL on the students' language learning motivation and pedagogical implications for future foreign language education will be discussed at the end of the presentation.

## 自己評価と英語学習意欲の関係に関する一考察－ Can-Do リスト・実力テスト・動機づけを比較して

教研 博士1年 石井 雄隆

自己評価については、言語学習動機や英語力をあげるものと言われている(中山 2001、菅原 2013)。自己評価には学習者が自分の学習を正しく判断できる力が必要であり、従って自己評価のためには教師は学習者の learner autonomy, self-assessment の能力を育成していく必要がある。学習者が、適切な自律学習・学習方略・目標設定・自己調整ができるようになるためには、そのための指導が欠かせない。今まで、外部指標としての色合いが高かった Can-Do Statements や達成度目標を自己評価に組み入れて、これらを能力育成に役立てた場合、そうすることが、英語学習に対しての意欲や動機づけとどのように関わってくるかは、興味のある課題である。

ヨーロッパの CEFR (2001 年) 策定の影響は、日本では、様々な教育機関での Can-Do リストの提示、大学や学校での Can-Do リストを中心に据えた教育設定などとなった。平成 25 年には CEFR-J の策定が行われた。平成 25 年 3 月に文部科学省が学習到達目標を「CAN-DO リスト」の形で具体的に設定するよう提言し、手引きを示した。中学・高校では、各校の現状にあわせて Can-Do リストを作成することとなった。

この研究は、(ア) 幾つかの高校・大学での Can-Do リストやこれを使った研究を検証し、(イ) 各校がその学校に適した Can-Do リストを作成するに当たり参考にできる知見を得ようとするものである。

また、この研究では、中堅の公立高校普通科の2年生3クラスを対象として、(ア)英語検定のCan-Doリストを参考に独自で作成したリストによる自己評価、(イ)英語の診断テスト、(ウ)動機づけアンケートの三者を比較分析した。今までの多くのCan-Doリストに関わる論文や研究は、大学やSELHi・中等教育学校) 中学・高校一貫校) によるものが多かった点で、公立高校普通科対象の本研究は意味のあるものと思われる。

Research Questions は、1) Can-Do リストによる自己評価と英語の実力テスト結果との間に関係があるか。2) 動機づけと Can-Do リストによる自己評価はどのように関係しているのか。の2点である。分析の結果、1) については、中程度) 0.5~0.4) 程度の相関があった。テスト上位者と下位者とを比較すると、上位者が高い自己評価をすることが分った。しかし、相関がそれほど高くないので、「自己評価が高ければ英語ができる」と即断できないということが言える。2) 動機づけとの関連では、自己決定理論による動機づけのアンケートによると、Can-Do リストによる自己評価は、内発的調整や同一視的調整とは緩やかな相関があったが、無動機とはマイナスの相関があった。また、内発的調整や同一視的調整の高い生徒は、実力テストの成績が、これらの調整の低い生徒より高く、無動機では、逆のことが言えた。このことは、動機づけの高い生徒は、Can-Do リストの自己評価を高くつける傾向があるということである。また自分の実力が高いという認識は、動機づけにつながるという可能性がある。反対に習熟度の低い生徒については、自己評価が低くなり、動機づけが低くなってしまう可能性がある。

## The Impact of Segmented and Interrupting Recasts on Japanese EFL Learners' Question Forms

教研 博士4年 浅利 庸子

The role of recasts provided during communicative oral interaction has been investigated in depth given its positive effect on learners' second language development (e.g., Long, 1996; Leeman, 2003).

However, previous research has reported that there are various types of recasts that differ in their degree of implicitness, and learners benefit more if recasts are provided less implicitly using salience enhancement techniques (e.g., Loewen & Philp, 2006). The present on-going study aimed to investigate the impact of two types of salience-enhanced recasts, namely, “segmented recasts” (the teacher’s provision of a partial recast of the learner’s utterance) and “interrupted recasts” (the teacher’s provision of a recast soon after the occurrence of the error), on the improvement in the accuracy of learners’ use of some question forms. 19 EFL students at a university in Japan participated in a pretest-posttest-design study over a 4-week period: one group ( $n = 6$ ) of participants received “segmented recasts”; one group ( $n = 6$ ) received “interrupting recasts”; one group ( $n = 7$ ) received recasts with no salience enhancement. The results revealed that all three groups increased their scores from the pretest to the posttest. Although the sample size was too small to justify a statistical analysis, the “interrupting recast” group increased their test scores the most, followed by the “segmented recast” group, and then the “control” group. Segmented and interrupting recasts can be beneficial for learners as they are cognitively less onerous for learners in detecting the locus of the error and noticing the gap between their interlanguage and the target language. Although the result of the study is far from conclusive, the study gives rise to a valuable pedagogical implication about the positive effects of these two types of recasts.

## Listening Training for Japanese Learner of English Based on Top-down and Bottom-up Process

教研 修士1年 根子 雄一朗

This study investigates how the top-down process and the bottom-up

process compare with each other in improving the listening comprehension ability of Japanese learners of English. On the assumption that these processes do indeed take place in listening comprehension, listening training methods have been developed which focus on either of these processes. However, the effect of these methods has not been confirmed; some researchers supporting one and some the other.

Hence, this study is designed to compare the effect of top-down and bottom-up training. Subjects of this study are Japanese students who are in the first year at senior high school ( $n = 80$ ). They were divided into two groups, the top-down group ( $n = 39$ ) and the bottom-up group ( $n = 41$ ). Each group underwent listening training for 10 to 15 minutes eight times. Before and after the eight training sessions, assessment was conducted in order to compare the effect of the methods on the subjects' listening comprehension ability.

The result showed that there was a significant difference between the pretest and the posttest in the top-down group, but not in the bottom-up group. Moreover, it turned out that almost half of the subjects in the bottom-up group decreased their scores after the training. These results seem to indicate the efficacy of top-down training and a potential negative influence of bottom-up training on listening comprehension.

The cause of these results may be attributed to the way in which the subjects used attentional resources for comprehension. In other words, the subjects in the bottom-up group may have spent their attentional resources to recognize each word but not to comprehend the whole message conveyed by the incoming speech. If this is indeed the case, the teacher should perhaps help learners to use their attentional resources for top-down processing rather than for word recognition.

On the basis of the implications of this study, I will conclude my presentation by proposing a teaching plan that can be applied to the classroom in Japan.

## The Effect of Shadowing on Acquiring English Rhythm

教研 修士 2 年 重政 真有子

This study examined the effect of shadowing training in the classroom to acquire English rhythm, compared with repetition practice.

Repeating is defined as an activity that requires learners to listen to certain amount of spoken language (e.g. sentence), and to repeat the sound they heard, during a long pause (Kadota, 2007). In contrast, the term “shadowing” is defined by Tamai (2002a) as “an act or a task of listening in which the learner tracks the heard speech and repeats it as exactly as possible while listening attentively to the in-coming information.”(p.181). In brief, the only difference between shadowing and repeating is whether there is a pause or not when the learners are mimicking the sounds. However, Kadota (2012) pointed out that there is a big difference between these two activities. Compared with repeating training, learners need to pay attention to the given sounds while they are shadowing, since there are no pauses. Therefore, the automaticity of sound perception would be promoted.

If shadowing affects the ability of sound perception, introducing shadowing training to English classes should be an efficient and practical way to teach English pronunciation. Some studies showed that shadowing is an effective way to acquire native-like English pronunciation. However, since the trainings in most studies were not done in classroom settings, it is not apparent whether shadowing is effective when introduced into school classes.

The subjects in the main study were 74 Japanese high school students. In the treatment sessions, the students were divided into two groups: a shadowing group and a repeating group. Before and after the treatment sessions, they read aloud three sentences while being recorded. Praat was used to analyze the recordings and to see if there were any changes in their rhythm. The result showed that there was not

effect of shadowing on acquiring English rhythm.

## Different Effects of Two Types of Reasoning Tasks in L2 Oral Production of High School Students

教研 博士1年 松村 香奈

This study is originally planned as a pilot study to find an appropriate oral test form to investigate the validity of debate oriented activities in L2 oral performance.

This study explores the effects of two types of reasoning tasks (debate type and giving an opinion with reasons type by answering a question) on the fluency, complexity, accuracy, and communicative adequacy or quality of achievement of the task in L2 oral production of high school students. Each type of tasks consists of two pairs of conditions to influence the processing load of task.

In the debate type task, subjects are asked to give two speeches to a resolution. The first speech is either an affirmative or a negative speech, which is his/her real intention. Then he/she is to make a speech of opposite side. In the second type of task the subjects make two speeches to give opinions with reasons to a question. The first one is a prepared speech with 15-minute-preparation for script. The second one is a pseudo unprepared speech, where the subjects are asked to make a one week old speech without any script with no announcement in advance.

In a study based on 30 high school low-intermediate subjects, the fluency of performance was found to have significant difference in both types of tasks. The result in the latter task type is as what had been expected, which is that a prepared speech generated more fluent language and also exceeded in speech volume. In contrast, the result in the debate type task is somewhat interesting in that the oral production

of real intention does not always generate more fluent language than the one of invention. In fact, the speech which is not from your heart showed more fluency in this case. Moreover, it showed even a trace of better adequacy. Though this may sound weird, the fact endorses the fairness of debate that you can be logical enough on either side.

## Analysis of Theme and Rheme in High School Students' Writing

教研 博士3年 大井 洋子

The study aims to analyse the topic development in Japanese high school students' writing in terms of theme and rheme. I have analyzed discourse markers, structure of organization, and coherence of students' writing, but theme and rheme have not been focused yet. Since the progression of "theme" and "rheme" is one of the factors which comprises coherence, it is meaningful to analyze the progression of the "theme" and "rheme" to find the way to improve students' written production.

82 Japanese high school students, one native English teacher and one Japanese English teacher participated in the study. Students were asked to write about 150 words on the guided writing topic and then both students and teachers assessed students' English composition using the same assessment sheet.

The assessment sheet consisted of five components: "Introduction", "Body", "Conclusion", "Discourse Markers", "Coherence", and "General Evaluation". Each component of Topic Development is composed of 3 scores, and "General Evaluation" is 5 point.

The inter-rater reliability between the assessments by two teachers showed a high correlation. The analysis was conducted based on the distribution of teacher assessment's scores of coherence.

The results showed that the frequency of the progression of theme and rheme was not related to the teachers' scores. Half of the students used all of the types of progression in their composition. Preferably the number of T-unit was connected to the scores. It was also observed that teaching the progression of theme and rheme could be helpful for students to develop a topic and learn how to make their written production coherent.

### Use of Graphic Organizers for Text Comprehension in the EFL Context

教研 修士 2 年 紀伊 雄太

This study, conducted with a two-group pretest-posttest design, examined the efficacy of the use of graphic organizers (GOs is the abbreviation of graphic organizers) representing cohesion for text comprehension in the EFL context. The effectiveness of GOs was measured by (a) their effects on subjects' overall reading proficiency, (b) subjects' comprehension of the text and (c) subjects' understanding of cohesion. Subjects in this study were two groups of students in the 11th grade at a Japanese high school. One of them, the GO group, was made to read a text in English and complete a GO while reading. The group was also given explanation of cohesion and other aspects of the text. The other group, the translation group, read the same text and studies it through the grammar-translation method, receiving explanation of the same aspects of the text from the teacher. The results obtained from a Reading Proficiency Test, a comprehension check test, and a questionnaire suggested that the use of GOs facilitated the comprehension of a given text and had the tendency to aid understanding of cohesion. At the same time, the use of GOs had no positive impact on overall reading proficiency.



## The Role of Own-Language Use in the Classroom

教研 修士2年 江端 信浩

The assumption of language teaching has been that new languages are best taught monolingually (e.g. Berlitz London, 2011). In Japan, the necessity of English-medium instruction (hereafter EMI) in English language education at secondary schools has been keenly recognized in these days (*Asahi Shimbun* (hereafter, *The Asahi*) 23 December 2008 & 9 March 2009; MEXT, 2010). EMI started officially at senior high schools in 2013 (MEXT, 2010), aiming at giving students opportunities to communicate in English (MEXT, 2010). In recent years, on the other hand, this monolingual assumption has been challenged (e.g. Widdowson, 2003), and teaching that relates the new language to the students' own-language has been reevaluated (G. Cook, 2010; Hall & G. Cook, 2012). These scholars point out that criticisms of own-language use such as translation have little to do with pedagogic principles (G. Cook, 2010; Hall & G. Cook, 2012; Widdowson, 2003). This research seeks to clarify how effectively the own-language, i.e. Japanese in this case, can be utilized in English language education in Japan by investigating advantages and disadvantages of monolingual teaching and those of bilingual teaching.

This presentation first briefly reviews the history of the advocacy of monolingualism. It then surveys key arguments that support the revival of own-language use. These arguments include English as a lingua franca (ELF), general learning theory, and sociocultural approaches. On the basis of the data collected at a high school in Japan by means of recording English classes, administering questionnaires, and conducting interviews, I will discuss the role of the own-language at school, and then consider teachers' and students' attitudes toward own-language use. The research on the role of own-language use will give teachers implications of the effective use of own-language for their teaching,

while clearly distinguishing it from the grammar-translation method.

## An Exploratory Case Study for Relationships Between Metacognitive Strategy Use and Conscientiousness

教研 博士1年 安田 利典

Learner autonomy has recently become an important topic in second language (L2) learning. While several aspects have been involved in its definition, learner's psychological capacity has mostly been spotlighted (e.g., Dickinson, 1995). Above all, metacognition leading to self-awareness and self-regulation has been regarded as the most important to raise learner autonomy (e.g., Sinclair, 1999). Ozeki (2010) puts special emphasis on Oxford's (1990) *metacognitive strategy* over the other L2 learning strategies, and claims that an autonomous learner is a skilled user of this strategy. However, L2 strategy use can be affected by some learner's characteristics (e.g., Ehrman & Oxford, 1989, 1990), and therefore, there may be some characteristics that influence learner's metacognitive strategy use. Although one possible factor is *conscientiousness*, which can be characterized as *organized* and *self-disciplined* (Dörnyei, 2005), in the Big Five Personality model, very few studies have discussed the issue. This study aimed at exploring the relationships between metacognitive strategy use and conscientiousness.

One 31-year-old male Japanese-speaking learner of English participated in the present study. He was asked to write a diary on his English learning experiences during his one-month course in the US and participate in some interviews after the study-abroad program. Narrative data have shown that although there is some relationship between metacognitive strategy use and conscientiousness, it can be explained more clearly when another factor, which this study calls "*behavior-eliciting personality*", is inserted between them. Thus, a suggested

statement to understand the relationship is as follows: He was efficiency-oriented (conscientiousness). Hence, he usually tended to think about how he could achieve a goal more efficiently (behavior-eliciting personality). And then, he made a plan on how to learn (metacognitive strategy). In conclusion, conscientiousness seems to be a promotional or obstructive factor in raising autonomy, but some other factors may probably be involved in the influence process. One of the future tasks will be to describe the relationships with structural equation modeling (SEM), which can include other factors to explain the relationships between the two targeted characteristics.